



ことば の 中西進 風景

角川春樹事務所

ことば
の
風景
中西進

角川春樹事務所

© 1999 Susumu Nakanishi
Printed in Japan



Kadokawa Haruki Corporation

中西 進
ことばの風景^{ふうけい}

*

1999年 8 月 8 日第一刷発行

発行者 角川春樹

発行所 株式会社 角川春樹事務所

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-27 二葉第1ビル

電話03-3263-5881(営業) 03-3263-5247(編集)

印刷・製本 中央精版印刷株式会社

定価はカバーおよび帯に表示してあります

落丁・乱丁はお取り替えいたします

ISBN4-89456-159-X C0095

ことばの風景
目次

す
む

- ある部屋……10 ミズモリヤリカタ……12 さび……14 辺鼓……16 経絡としての道……
18 男はいつも借家人……21 博物館を外から見る……23 鬼の住み家……25 ビル墓
場……27 桃山おとめ……29 立面の都……32 タクシー……35 普遍を視る目……37

た
べ
る

- ドラ息子の子精神……44 ホトトギスの子育て……46 身と体……48 カラス……50 ある
真夏の静寂……54 とじ目……57 料理は花……59 白樺ジュース……62 あなたが主役
です……64 白鳥を食べる……66 くさる……68

い
きる

- 中国も見渡す反逆児——藤原広嗣……74 性急すぎた改革主義——恵美押勝……79
流沙のかなた真実求め——高岳親王……84 悲願に倒れた才人——伴善男……89 合
戦を栖とした若武者——護良親王……93 権威無用のエネルギー——高師直……98
権勢を超えて生き抜く——高山右近……103 祖国との貿易果たせず——山田長政……
108 蝦夷地へ誘う自由の風——菅江真澄……113 正義感「救民」をかかげる——大

塩平八郎… 118 幕末版ネットワーク——島津斉彬… 122 虚飾を排し「人間」描く
——絵金… 127 「狂」に徹し世の内側描く——河鍋晩斎… 132

かたる
スリの話… 140 やまとことばの復権… 144 あらう… 146 紙と文化… 148 遊び… 151
なおす… 153 とがめる… 155 親孝行… 157 リアル・バーチャリティ… 160 ステン
ドグラス… 164

ゆく
中上健次の死… 172 トルストイの幸福の杖… 174 松本清張の死… 176 木精となつ
た歌の言霊… 178 雪が降る… 185 司馬遼太郎の死… 191

出あう
魯迅の旧居… 206 武満徹… 212 秋瑾… 218 千利休… 224 日本語… 230 裁判官… 236
故郷の秋… 241 高野槇… 247 道… 252 巴紋… 258 光… 264 月夜… 270

あとがき… 276

装
幀

伊
藤
鑛
治

ことばの風景

す

む

私たちはそれぞれ家に住んでいて、「すむ」ということばに何の注意も払わないが、「すむ」というのは、いったいどういう内容をさすのだろう。

英語でいうと「I live in Kyoto」などというから「生きている」という感じがつよい。しかし「すむ」からは、どうもそういう意味はでてこない。

「すむ」は「住む」だが、やはり「澄む」と同じことばらしい。『万葉集』に「家にもたゆたふ命波の上に浮きてしおれば行方知らずも」という歌がある。作者はいま旅の途中で船に乗っているから、浮いて漂たがよっている。そもそも家にいたって命は漂っているのだから、こう浮いていると心細さが限らない、と歌う。この「家にいたって漂っている」という言い方には、家では漂っていないはずだという前提がある。水のようにゆらゆら揺れていないで、じつと静まって安定しているのが、家の状態であった。

揺れている水は濁っている。それがおさまって、じつと澄んでいる、それと同じ状態が「すむ」である。

家と旅は、対義語アンチニムだった。旅の命は不安定で心がゆらぐが、反対に家にいると身も心も安定する。それが家に住むことだった。

そのことを思うと、ぎよっとする人が現代では多いかもしれない。せいぜい家なんか寝に帰るところで、大半は会社ですぐす人は、濁りっぱなしというわけだ。心の安定なんかない。

いったい日本人の家は兎小屋などからかわれる。欧米にだって兎小屋はいっぱいあるから国を超えたはなしだが、どこにせよ家が兎と同じとなれば、なかなか「澄む」わけにはいかない。そこで「狭いながらも楽しいわが家」という心が、いいことになる。狭い広いは問題ではない。要は心で、どのように家で心の安らぎを得るかだろう。

会社でどんなに嫌なことがあっても、帰ってくるとほっとする場所が家だ。石川啄木は「友がみなわれよりえらく見ゆる日よ花を買ひ来て妻としたしむ」といった。外での闘争心がおさまり、花を妻とともに楽しみながら心安らぐ場所が「すむ」ところである。——
もつとも、この時啄木は一月の給料分の花を買ったというのだからはげしいが。

住居のことを「わたしの家」という人がいる一方「わたしの住まい」という人がいる。

「い」がつくとずっと住みつけける意味が加わるから、いつそう心の安定感が深まる。家を愛しているんだなと、聞いていて思う。

「すまい」と「くらし」をいっしょにして「住まいと暮らし」というと、大事にしている住居で、どのように日々をすごすかを、熱心に考える豊かな心がうかんでくる。

わが家には一センチほどの雨蛙が二匹、何年か前からすみついている。彼らもここで心澄んでいるのである。

ある部屋

以前、土地を買わないかといわれて、不動産屋につれていかれた敷地がある。いまにも崩れそうに古い家屋が建っている。「お売りする時は、さら地にしますよ」と業者はいう。じつは、さる有名な女性解放運動家が住んでいた家である。人手にわたり、その人も亡くなり、遺族が売りに出したらしい。久しく無人だった気配である。

私は家の中に上がってみた。なかなかりっぱで、さすが進歩的な知識人の住まいと見えた。が、ふとのぞくと台所の横は畳敷きの三畳間で、北向きだからいかにも暗い。ほのぐらい光の中にぼろぼろになった畳が綿のようにふくれ上がっていた。

そして一隅の半畳は板敷きで板の金隠しがぼつんと立っている。二畳半の畳と半畳のトイレ。要するに刑務所の独房と同じ構造である。いやそれをはるかに狭くしたものといえる。

昔でいう「女中部屋」である。私は部屋を見わたしながら、この家の主人であった女性の、華やかな女性解放運動の数々を思い出していた。教育者としての言動、最後に得た顕けん

職^{しよく}。

この経験はもう何年も前のことだが、それをまた昨今思い出したのは、週刊誌などで某知事の公邸が一千坪に及び、浴室は大理石張りだと騒がれているからである。一般の住宅でもいまや浴室やキッチンに凝^こる時代だという。大いに結構なことだが、知事室の大理石の浴室と、独房まがいの部屋のトイレとが、今こもごもに私の脳裏に浮かんできて仕方ないのである。

ミズモリヤリカタ

家の外まわりの工事をする事になって、業者に見積もりをたのんだ。

見積書にはいろいろな項目がある。門だの塀だの。はたまた植栽しよくさいの植物のかずかず。見ているだけでも、もうわが家にはユキヤナギやライラックが咲き乱れて来て楽しい。

と、見積書のまっ先の項目は「水盛遣方」とある。私は思わず歓声をあげた。「わあー、いいなあ。ミズモリヤリカタか」と。一体いつごろから使われていることだろう。江戸時代そのまま、幸田露伴うらたろはんの『五重塔』ではないが、のっそり十兵衛が今にも出て来そうな感じである。

このことばはすでに業者の間に残るだけだろう。世間一般からは消えてしまったろうが、古いことばにはゆかしさがある。いや古い方法を残しつつづけているからこそ、ことばも残るのであろう。そのことがゆかしい。

水盛とは水平を測る器具のことだ。遣方とは中心線をきめて紐ひもをひっぱったり、板で枠ぐみを作ったり杭くいを打ったりすることだ。建造物ができる前の下ごしらえである。

要するに工事の基本が水盛遣方である。まずは水平を測ることから工事を始めるといふ基本がことばとともに守られ、見積書の最初にもあげられることとなった。いってみれば当然のことだが、まず水平であることが万事の基礎だったということに、私は改めて思い当たった。あの水盛の中心にある水。左右均等であることをもって水平とし、何十メートルという大ビルもその一瞬の水の静まりから建てられる。

一滴の水の平静なバランス。バランスをとることが万物の基礎だということは、私にとって大きな示唆^{しさう}となった。

さび

「何でもさびが付かんと、いかんです」

このタクシーの運転手は、なかなかのがんこ者だ。さつきからしきりに自説を展開してやまない。

「ほれ、新しく積んだ石垣は落ち着いとりませんやろ。向こうの方は古いものですけえ、きれいです」

私は横目で城の石垣をにらむ。そして彼の背中を、あらためて見る。初老の肩幅の広い男だ。

彼が「さびが付く」といい出した時、私はこのことばがおもしろくて、ついつい話し込んだのである。ナイフがさびつく、身から出たさび——、さびなんてろくでもない奴ばかりなのに、さびをしきりにほめるからだ。

要するに古色に包まれた、いかにも歴史を感じさせるものの方がよいというのだろう。

古代の御仏たちも、今や黄金の輝きをすっかり落として、黒光りしているが、それこそが